



HCAP 東京大学運営委員会

Harvard Conference 2016 報告書

2016年2月

HCAP 東京大学運営委員会 10期





目次

ハーバードカンファレンスとは.....	3
ハーバードカンファレンス 2016 概要.....	3
学術企画について.....	4, 5
文化企画について.....	6, 7
交流企画について.....	8, 9
おわりに.....	10, 11



ハーバードカンファレンスとは

ハーバードカンファレンスとは、ハーバード大学にある Harvard College in Asia Program(以下 HCAP) の本部が企画運営を行う一週間に渡る国際交流プログラムのことである。アジアの 8 か国から学生が参加し、学術企画・文化企画・交流企画の 3 種類で構成されるカンファレンスを通して参加者間の交流を促進し、相互理解を深めることが達成されるようカンファレンスが作られている。

ハーバードカンファレンス 2016 概要

主催 HCAP Harvard 本部

開催地 Harvard University

日程 2016 年 1 月 16 日(土)～2016 年 1 月 23 日(土)

テーマ

Equality, Tolerance and Freedom : The Effect of Culture and Policy on a Globalized World

参加者

ハーバード大学学部生 83 名、東京大学(日本)・University of Hong Kong(香港)・St.Xavier's College(インド)、Ewha Womans University(韓国)・Bosphorus University(トルコ)・American University in Dubai(アラブ首長国連邦)・Chulalongkorn University(タイ)・Singapore Management University(シンガポール)は学部生各 8 名ずつ 計 147 名

学術企画について

学術企画総括

学術企画では、本年度のテーマ“Equality, Tolerance and Freedom : The Effect of Culture and Policy on a Globalized World”に基づき、特に世界に存在する様々な不公平に焦点を当て、様々な観点からレクチャーやパネルディスカッション、ワークショップが行われた。また、グループワークでは参加各国の抱えている不平等についてのケーススタディを行った。様々なバックグラウンドを持つアジア及びアメリカの学生と議論を行うなかで、お互いの価値観を理解し、分かち合うことができた。

レクチャー・パネルディスカッション

レクチャー・パネルディスカッションでは、経済格差、健康状態に表出する格差、人種差別、男女・LGBTQ 差別が扱われた。経済格差については、都市と経済格差、経済格差の解消方法としてのエクイティについての講義を受け、健康と社会的経済的地位の相関については、学生からの発言を取り入れつつ、人種・収入・性別等がどのように健康を左右するかの講義を受けた。人種差別、男女・LGBTQ 差別については、当事者の方を招いたパネルディスカッションでは彼ら・彼女たちが問題をどう捉え、どのような取り組みを行っているかを聞いた。当事者が語った差別の体験やそれらを乗り越えるために行ってきた努力についての話は、非常に印象的であった。

特に、アジア系のアメリカ人の登壇者が、自分自身が内在的にアジア系への差別意識を持っていたと気づかされた体験の話から、自分も文化に根付いている偏見や差別意識を意識せずとも自分も持ってしまうのではないかと考えさせられた。いずれの講義でも質疑応答の時間が設けられたが、ハーバード生をはじめとして多くの学生が鋭い質問をし、登壇者との活発な議論がみられた。



ワークショップ

ワークショップでは、自らの大切にしているものや各自の置かれている環境について考え、それを他の国の生徒たちと共有した。例えば、「十分な医療を受けられる保険に入っていますか」や「両親に育てられましたか」などの質問を投げかけられ、自らの境遇について考え、それが幸せとどのような関係を持つのかについて議論を交わした。答えづらい問いもあったが、各々が自分の境遇について考え直す機会となった。本カンファレンスの参加者は経済的に恵まれた家庭出身の人が多く、そのような状態でこのアクティビティを行うことへの疑問を呈する参加者もい

ケーススタディ

ケーススタディでは、全ての国の参加者が含まれた8つのグループに分かれ、移民に対する不寛容、LGBTQ差別等、いずれかの国の不平等について議論し、大学において実現できる解決策を模索した。身近な不平等がテーマだったため、各人が実際に目の当たりにしている問題について議論を行うことができた。日本を担当したグループは、日本社会に厳然と残る男女の格差について扱い、解決策としては理系の学部や大学により多くの女子が来るよう、小・中学生の女子向けの説明会を通して女子の関心を高めると共に大学に行きたいという思いを支えるための女子限定の奨学金等の制度作り等について考えた。発言量に差はあったものの、全員が話し合いに参加し、意見を述べたり、自分の国での状況を説明したり、自国で導入されている解決策を提示したりしており、活発な議論が行われた。最終日にはグループごとに話し合いの成果のプレゼンテーションが行われ、現状の問題点や考えた解決策、今後の課題を全体で共有した。中には、すぐに実現が可能までに具体的な案も発表され、議論の成果が垣間見えるものであった。



文化企画について

文化企画総括

ハーバード大学生と、更にアジア 8 カ国の学生が集まるのがこのハーバードカンファレンスである。出自も現在身を置いている環境も違う学生たちが自身の文化背景を伝え合う企画が行われた。本カンファレンスならではの醍醐味が濃縮されていたように思う。



アイアンシェフ

この企画では各国が 20 ドルの予算と企画開始直前に明かされるある材料を使うという条件のもと自国の食文化を活かした創作料理を作る。今回指定された材料はライムだった。私たちはライムを隠し味に使った抹茶のパウンドケーキを作った。味のみならず盛り付けにもこだわり、最も美しい料理という賞を得た。自国からスパイスを持参していた国や伝統的な料理を作った国もあり、どの料理も美味しく、料理の作り方やその国でのその料理の位置づけ等の説明を聞くことを通して、食という観点から各国の文化に迫ることが出来たように思う。「このケーキは日本でよく食べるの？」や「昔から受け継がれたレシピなの？」などと興味を持ってくれた海外参加者もあり、もっと手の込んだ和食や郷土料理を作ればよかったと少し後悔したが、日本食が好きだという他国の参加者と食事の話で盛り上がったことも良い思い出となった。

ハーバードキャンパス / ボストンツアー

3月に東京を訪れるハーバード生の案内のもと、ボストンとハーバード大学キャンパスを巡るツアーが行われた。ハーバードツアーでは美しいキャンパスをまわり、大学の歴史や様々な伝説、日頃どのような大学生活を送っているかを実際に通う学生の口から聞くことができ、彼らが日々過ごす世界に触れられたように感じたと同時に、学問の地としての伝統を体感することが出来た。加えてキャンパスが溶け込んでいるボストンの街そのものも歩き、美しい街並を楽しめたのみならず、独立戦争に関する史跡を訪れ、ボストンの歴史を感じることができた。



MFA/ ナチュラルヒストリーミュージアム

ボストンの誇る美術館やキャンパス内の博物館を他国の学生たちと共に訪問した。規模や展示されている内容の幅広さ、そしてその内容の精緻さは目を見張るものがあった。美しい展示品の数々を心ゆくまで鑑賞でき、濃密なひと時を過ごせた。作品を見ているときには多くを話さなかったにも関わらず、訪問を終えると互いの仲が深まっていたことがとても面白く感じられた。美術館には日本の浮世絵や彫刻もあったが、それらについて深く説明するほどの知識を持っていないことが悔しく感じられ、国際交流する際には自国の文化をよく知っていることが大切だという頭では分かっていたはずのことを痛感した。

交流企画について

交流企画総括

147人の集団がたったの一週間で相互交流を達成することは至難の技であるため、本カンファレンスには参加者同士の親睦を促進するための企画が随所に配置されている。他の企画に比べ、終始和やかな雰囲気の中で親善が図られた。

お菓子の家作り

無作為に割り振られたグループに分かれ、ジンジャーブレッドやキャンディーなどを用いてお菓子の家を作る企画であった。マサチューセッツ州会議事堂やバンカーヒル記念塔を模したものなど、数多くの力作が見られた。即席のチームで作業を分担し、完成を目指し協力していくうちに交流が深まった。

カラオケ

大学キャンパスからほど近いカラオケ店にて実施され、お互いに十八番を披露し合い大いに盛り上がった。東京組は香港組と同じ部屋を割り当てられたため、この夜をきっかけとして一気に交流が深まった。各国の母国語の歌を聞くこともでき興味深かった。





タレントショー

本企画では各国がそれぞれの国の特色ある出し物を行った。東京大学はメンバーの特技を披露し、日本の「カワイイ文化」を代表する J-POP を全員で踊った。他支部からは、イスタンブールの民族舞踊や、香港のカンフー映画の寸劇などが披露された。どのパフォーマンスもレベルが高く多様性を感じさせる企画だった。

Mr. HCAP

本企画は、我こそはと名乗りを上げた出場者たちが己の話術、特技を用い、各国から集められた審査員の歓心を競う企画だった。東京大学のメンバーからは三人が出場した。また三名は審査員として参加した。参加者の魅力あふれるパフォーマンスにより会場は大いに盛り上がった。

People Scavenger Hunt (人間品揃え競争)

自分と同じ特徴を持つ人を探し出し、質問をする速さを競うこの企画は初日にデリゲーツの親睦を深めるために行われた。「自分を動物に例えるとしたら何か」や「相手を笑わせる話をする」などの気軽に取り組むことのできるお題でハーバード生や他のアジアの学生との距離を縮めるとともに、「同じキャリアプランを持つ人を見つける」というお題で将来の目標について話すこともできた。

おわりに

1月16日から1月23日にかけて、HCAP 東京大学運営委員会にとっての10度目のハーバードカンファレンスに参加してきました。つい先日団体の草分けである1期の方に偶然お会いする機会があり、当時のハーバードカンファレンスの様子を伺って、計1000人以上が参加してきたこのカンファレンスの意義を噛みしめました。これは一重にご協力・ご協賛いただいた皆様のおかげであり、代表して深く御礼申し上げます。

今年度のハーバードカンファレンスのテーマは、“Equality, Tolerance and Freedom : The Effect of Culture and Policy on a Globalized World”でした。これはHCAP Harvardが設定したものであり、非常に抽象的なテーマであるものの、先見性に富み奥の深いテーマでした。このテーマを通してHCAPが目指したのは「格差」です。世界にはあらゆる「格差」が厳然として存在しています。経済格差、健康格差、ジェンダー格差、教育格差など、全ての格差は連関しながら大きな問題を引き起こしています。21世紀に生きる私たちは、自由・平等・寛容の精神を持って格差の広がる現状にどのように立ち向かっていけるのでしょうか。そのような遠大な課題に基づく構想を掲げ、このカンファレンスはとり行われました。私個人としましては、このカンファレンスにおいて「創造的なコミュニケーションとしての対話」を最大限行うことを目標としていました。国際交流のカンファレンスにおいては学術的な面に注目が行きがちですが、文化交流的な面にも様々な意義があると考えています。机を囲みLGBTQについて議論を交わす時も、駅から美術館まで歩いて移動する時も新たな気づきを発見して相手や自分について何らかの知見を得るチャンスとなります。そのような「対話」のために必要なのは、相手をしっかり受け入れ、自分の意見を十分に発信するという一聞非常に単純なことだと思います。私はできるだけタブララサの状態でのこのカンファレンスに臨もうと考え、他の東大生も皆強い思いを持って臨んだことかと思えます。

実際のカンファレンスにおいて、抽象的なレベルで設定した「創造的なコミュニケーションとしての対話」を達成するのは容易ではなく、また振り返ってみてそれが十分達成されたのか答え切ることにはできません。まず前述のテーマに基づいて行われた学術企画に関してですが、ハーバード生を始めとする他国の学生の本気を十全に引き出せなかったのが心残りです。ケーススタディにおいて私は東京大学のメンバーを代表し、各国のデリゲートに東京のケーススタディの道標を示す役割を担いました。各国独自の視点を引き出し、現在行われていないある程度有効な施策を思いつくことができました。ただ、各国の学生が共に格差の広がる現状に対して挑戦するという熱量、強い理念は感じられませんでした。問題分析や解決策提示の際の視点の違いを知るのは興味深かったのですが、格差の現状をより強く伝える工夫が更にできたように思えます。そして文化交流企画や自由時間においてなのですが、総じて自らのコンフォートゾーンから出るのを躊躇してしまった東京大学のメンバーが私を含めて多かったように思えるのが大きな反省点です。これが、東京大学のメンバー一人一人の目標の達成をかなり妨げてし

まったことと思います。バックグラウンドが大きく違う相手を受け入れ、自分をしっかりと発信するには苦労がいり、強制力がない中で踏み出すのは勇気がいるでしょう。

ハーバードカンファレンスにおいて参加者全員の意識は、程度の差はありますが、交流することに向いていました。私は国際交流の一つの大きな意義はそこにあると思っています。同じ方向に意識を持つ人々が小さな場所で濃密な体験を共にすることで、「対話」もまた促進されていきます。このカンファレンスでは特にそういった共通の意識が顕著だったように思えます。やりきれない部分が残ってしまったものの、そういった空間のおかげか、相手の理解を通して自分についてよりよく知る機会となりました。そして、外にはこんな面白い人たちがいるのかという、感動に近い気持ちを抱きました。そして、このカンファレンスの全日程、思い出せる限りの全ての場面を楽しむことができました。

私たち HCAP 東京大学運営委員会のメンバーは 14 人おり、今回ハーバードカンファレンスに参加したのは 8 人となっています。このカンファレンスに行けなかった 6 人の分の責任を背負い切ることはできたのでしょうか。また、これまでに多くのご協力・ご協賛をいただいた皆様のご期待に応え切ることはできたのでしょうか。それらはこれからの私たちにかかっているのだと思います。ハーバードカンファレンスは終了したものの、私たちのやりたいこと、やるべきことはこれからも続きます。3月に東京大学運営委員会が企画する東京カンファレンスに向けて、今回は多くの学びを得ることができました。それらを実際の企画において適用して実践することは肝要です。また、ハーバードカンファレンスが自分たちの人生にとってどういう位置付けのものであるのか、折に触れて振り返り、発信し、還元していく所存です。末筆となりましたが、改めてお世話になった方々に深謝いたします。今後も3月の東京カンファレンスに向けた準備に尽力していきますので、どうぞご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

HCAP 東京大学運営委員会 10 期代表 高橋知之

